

第5章 宮廷組織と食材分配

はじめに

一三世紀のラスール朝宮廷における多様な食材の獲得は、イエメン内外のネットワークの発展と関連して生じた一事象としてとらえられた。ラスール朝は、紅海とインド洋をつなぐ南西アラビアを支配したことによって、そこを行き交う多種の産物や財の獲得に成功したのである。一方でこうした状況は、ネットワークに着目してのみ説明されるのではなく、合わせてラスール朝の「王権」も検討される必要がある。なぜならば王権は、支配域において政治的経済的な影響力を持つと同時に、ネットワークの形成と深化にも寄与するものとみなされるためである。したがって、ネットワークと王権がそれぞれの生成・維持・強化において相互に作用し合う関係にあった点が、より考察されなければならない¹。

このことは、先行研究では着目されることがなかった、ラスール朝宮廷組織による食材分配に現れている。宮廷による富の再分配に関して言えば、中央へ集積した中国陶磁器や東南アジア産の香料・香辛料類、各種の織物、財が、給与や下賜、贈物のかたちをとって、ラスール家の男性成員や配下の者、アデンを訪れる商人、他王朝に対して分配されていたことが、先行研究にてすでに指摘されている²。宮廷食材の分配に目を向けると、その分配先はよ

り広く、ラスール家の家内集団や女性成員、支配域に近接する——あるいは内在する——諸勢力に至るまで多岐にわたっていたことがわかる。ラスール家内部で繰り返されたスルタン位をめぐる争いのなかでは、家内奴隸や女性成員が重要な役割を果たした。³ また、南西アラビアには、北部山岳地域（上地域）を拠点としたザイド派イマーム勢力や、独立性を持った各種部族が乱立しており、ラスール朝による支配を難しいものとしていた。こうした状況下で多方面に対して行われた食材分配は、イエメン内外においてネットワークが機能していたこと、イエメンにおいてラスール朝王権による秩序が成立していたこと、それらをラスール朝が維持・強化しようとしていたことを示す、格好の事象である。

そこで本章では、一三世紀のラスール朝宮廷における食材分配を、その実施機関である宮廷組織と食材分配の実態に着目した考察によって、ネットワークや王権との関わりのなかに位置付けることを目的とする。ラスール朝宮廷への食材供給やそれに続く食材分配が、ネットワークと王権の相互作用のうちに生じた事象であると同時にそれらの創出に影響を与えるものであったことが、本章の分析を通して明らかとなるだろう。

1 宮廷組織の検討——ハーナを中心に——

(1) ハーナ

『知識の光』に目を通すと、食材などの宮廷物資の調達や分配を主に担っていたのは「必要品館」であったこと、また、「飲料館 (sharbkhanah)」や「厨房」が宴席へ給される料理をつくっていたことがわかる。⁴ これらはいずれもラスール朝の宮廷に設置されていた機関であるが、その実態については未だ検討の余地が残っている。本節では、

食材分配の主体者であった宮廷組織、特に物品の調達・管理に携わっていた機関である「ハーナ」について検討する。

本書でいうハーナとは、その名称中に、ペルシア語で「館」を意味する「ハーナ (Khanah/Khana)」の語を持った機関のことを指す。ラスール朝宮廷には複数のハーナが見られたが、それらは、飲料館 (sharbkhanah) のように、管理していた物品 (飲料 (sharb)) に、「ハーナ (Khanah/Khana)」を付した名称を持っている点で共通する。本書では、史料から引用する場合を除いては、sharbkhanah のように語尾を「khanah」で統一して記述する。

『知識の光』中には、必要品館、乗物館 (rakabkhanah)、鎖帷子館 (zaradkhanah)、軍楽器館 (tabkhanah)、鹽館 (fashkhanah)、武器館 (silakhanah)、飲料館、料理用具館 (shanjarkhanah)、衣装館 (farskhanah)、応接館 (mamakhanah) の、一〇種類のハーナが見られる。宮殿における諸事が遂行されるために必要な各種物品が、これらのハーナにて扱われていた。ハーナは時を超えて継承されていく制度として確立されているとともに、属人的な要素も持ち合わせていたと考えられる。すなわち、「ムザッファール一世の必要品館 (al-hawa'ijkanah al-Muzaffariya)」や、「アシユラフ一世に由来する特別な聖なる厨房 (al-mabakh al-karim al-khass al-Ashraf)」といったスルタン個人に属する機関も、史料中に記されているのである。

ハーナでは、専門とする物品を調達・管理するために様々な人材が配置されていた。たとえば各館の倉庫の管理者としてミフタル (miftah) が、従業員であるグラムやアブドとともに置かれていた。物品の詳細の記録や、物品の供給を要請する文書作成に従事したのは、書記である。『知識の光』中に明記されないが、書類手続きに関する記事によれば、ウスターダールがハーナを含む諸館 (buyut buyutat) を統括していた。

こうした制度のラスール朝への流入は、先行諸王朝の機構をラスール朝が継承したことによって起こったと見られる。しかし少なくとも、ウマールが五六三／一一六七―八八年に書き終えた『イエメン史』には、ハーナに関する